
悲しまないで

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しまないで

【Nコード】

N1500A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

「人間だとよかった！」今まで、自分が人間だと思って生きていた少女・雪乃^{ゆきの}。雪乃は妖^{まじ}：病弱な恋人の少ない命を、無意識に吸い取ってしまう自分に葛藤していた。

哀と悲

雪乃^{ゆきの}、彼女は言った。

『人間だとよかった』と。

目に、溢れんばかりの涙を浮かべて。

彼女は妖怪、そうとは知らずに、人間として育った。

「待つて！行かないでくれっ、なぜ、なぜなんだ！？」

雪乃は、追いつがる自分に『さよなら』と一言、そう言つて身を翻した。

冷たい風に遮られて、腕で顔を庇つてやり過ごす。

顔を上げると、そこから、彼女の姿はなくなっていた。

ただ、涼風だけが、そよそよと吹きすぎていた。

人気^{ひとけ}のない、薄暮れの公園に佇む一人の少女。

雪乃だ。

「雪乃：これで、よかったのか？」

雪乃の足元に座っている、犬に似た白い獣が、男の声で少女に訊いた。

「一緒にいてはいけないの：あたしは、あの人を死なせてしまふ」

雪乃、と呼ばれた少女は、公園のベンチに腰掛け、両手で顔を覆つて言った。

「雪乃、お前は優しいな」

白い獣が、雪乃を慰めるように、すりすりと頬寄せる。

「咬^{きょう}：おいで、お前はいい子ね」

雪乃は、咬と呼んだ獣を抱きあげて、そつと呟いた。

雪乃は、自分が妖怪であることを知らずに育ち、人間として生きてきた。

初めは人と変わらず、養い親の女性と暮らしていた。

しかし、10年もしないうちに、養い親は亡くなってしまった。

それは 長い年月が過ぎていたのだ。

雪乃の10年は、人間の世界でいう、100年に相当するものだったのだから。

『おかしい』と思った。

年はとるのに、若い姿のまま、まったく姿が変わらない我が身。

そうして、ついに、雪乃に『迎え』が来た。

それは、ある日

あまりにも突然に。

居間で、一人物思っていた雪乃は、かすかな鈴の音を聞いた。

「猫かしら…なにかいる」

出窓を開け、雪乃はなるべく、白い子猫のような獣を脅かさないように近づいていった。

「おいで、猫ちゃん…お腹空いてるかな？」

手を差しだして、撫でようとした瞬間、白い獣は、実に人間くさく、面白そうにニヤリと笑った。

「迎えにきたよ、雪乃」

「ええ!？」

雪乃は、半歩後じさる。

「迎えにきたって、なんの話?でも、どうしてあたしの名前を…猫が喋ってる」

「一気に言われてもなあ、返事に困るよ。でもまあ、これだけは言える、雪乃…君は妖怪だ、人間じゃない」

獣は、ぐんと伸びをすると、倍の大きさに変化した。ふっさりとした尻尾を、振りながら言う。

「よーかい?それが、どうしてこんな所に?」

「迷子、だったのさ」

「ねえ、迎えにつて、これからどこかへ行くの?」

雪乃は目の前にいる、得体の知れない動物に、おずおずと問いかけ

てみた。

「どこにも行かないさあ、君に『チカラ』が備わっているかどうか見に来た。丁度いい頃だったからね。俺は咬きょう、これからは一緒にここで暮らすのさ」

「なにを、するの？」

「そうだな、そこら辺にいる雑鬼オニでも使って遊ぶか」

言った途端、いつからそこにいたのかも分からない雑鬼たちが、蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

雑鬼というのは、グロテスクな虫類に似ている。

しかし、それでも命を奪うのは躊躇ちゅうわれた。

「こ、殺すの？イヤよ、そんなの、可哀相よ」

「まあ、仕方ないと思ってね」

咬は、雑鬼の尻尾を掴つかんで、くるくると弄んだ。

抓つかまれた雑鬼が、キイ、と泣きわめく。

「イヤ、イヤよ…殺すなんて！」

「そう言わずにさ…ほら！」

そう言くと、咬は雪乃の手を素早くひつかいた。

「痛い！なにをするのよっ、えっ、ええ？なにこれ！」

雪乃の姿は、咬と同じ白い獣に変わっていたのだ。

「なに、どういうこと?!」

「雪乃の本性さ、俺たちは白狐キツネだ」

うろたえる雪乃に、咬は嬉しそうに言った。

「イヤよ！元に戻してっ」

「そうはいかない、『あれ』を捕まえたいだろ？きっとそう思っているはずだ」

狐になった雪乃の体は、低く構え始め、咬の放した雑鬼に、狙いを定めている。

「やだっ、か、体が勝手にっ、いやああ

」!

悲鳴と、鮮血が、空間を鋭く切り裂いた。

あの頃は本当に、まだ何も知らなかった。

「雪乃、もう平気か？変な顔してたぞ？」

皎が、心配そうに擦り寄ってくる。

「大丈夫、帰ろうか？」

「そーだな、ホントに平気か？」

「もう、いいの、なにも…言わないで」

二人は、家路を辿り始める。

たそがれ
黄昏の道を行く二人に、影はない。

玄関先で、雪乃の足が止まる。

階段下に佇む影が、ゆらりと動き、雪乃を呼んだからだった。

「雪乃…」

「ゆ、裕一さ、ん…帰って、お願い、もう会わないって」

「お前が人間じゃないから？俺は、それでもいいと、言っただろ？」

苦しげに喘ぎながら、搾りだすように彼は言う。

違う、違う！

自分が言いたいのは、そんな事じゃないのに…。

あたしから、離れて、近寄らないで。

あたしは…。

「あなたを…死なせてしまっ」

雪乃の目からは、ポロポロと、大粒の涙が落ちていく。

「お前がしなくても、いずれ死んでいく…だからっ」

「だめよ！生きる時間が違いすぎるのよっ」

「それでもいいっ！ぐっ、げほっ、げほ」

裕一は、ひどく咳き込む。

口を押さえた掌には、べつとりと血糊がついていた。

「なんで…こんな無茶を！病院に戻りましょっ？」

雪乃は、慌ててよろけた裕一を支える。

「い、やだ…せいぜい、持って2年だ。好きにさせてくれ…」

そう言つて、また咳き込み。

ついに裕一は、意識を手放した。

「裕一さん…裕一さんっ、しっかりして！ううつ…お、重いっ」

雪乃は、必死に裕一を背負おうとしてもがく。

華奢な雪乃に、大柄な裕一が背負えるはずもなく、雪乃は血が滲むほど、唇をかみしめた。

「ったく、しょうがねえな…人間つてのは」

傍で見ていた皎は、くるりと宙返りをして、男の姿に変化し、裕一を抱え上げた。

「皎…！行つてくれるのね？お願い、病院に急いでっ」

彼は、重病で大学を休学していて、やっと復学した矢先のことだった。

「まだ落ちついてないから、長話はダメよ？」

点滴を調整していた看護婦が、気遣わしげに雪乃に目配せして、病室を出て行く。

「はい」

「…雪乃？来て、くれたのか」

目を閉じたまま、裕一は、傍にいる雪乃に手を伸ばした。

「ええ、早く…少しでもよくなつて」

雪乃は、伸ばされた手を強く、しかしやんわりと握りしめた。

「心配、してくれるんだな…雪乃」

「当たり前よ」

憤慨した雪乃の声にしばらく間をおいて、裕一はゆっくりと目を開く。

「傍に、いてくれないか…頼むよ」

裕一は、表情を和らげて、雪乃の手をそっと包みながら言った。

「あたしはどこにも行かない、あなたの傍にいる」

「…ありがとな」

大きく見開かれた裕一の瞳から、幾筋も、涙が伝いおちていった。

「そろそろ行くわね、3時半で面会は終わりだから…」

「ああ」

雪乃は、静かに病室のドアを閉めた。

あたしには分かった。

2年どころか、彼が半年も生きられない、ということが…。

「雪乃… 本当に、優しいな」

影の中から、するりと現れた人型の咬が、気遣う様に、雪乃の頭を撫でた。

「咬… 人って、可哀相ね」

痛み（前書き）

妖の雪乃といることを望んだ、重病人である裕一は、僅かながらの回復を見せ始めていた。それは、自らの命を削っている、雪乃のお陰だった。 < b r >

痛み

妖狐である雪乃は、人間の命を吸い、やがては衰弱させてしまう。裕一の、少ない命をさらに減らせてしまうのに、分かっている、彼はそれを望んだのだ。

季節は、風が吹くように、あっという間に過ぎゆき、そして、とうとう雪が降った。

日に日に、彼の命が衰えていくのが分かる。その度に、胸が灼けるように痛むのだ。

「雪か…よく降るな。雪乃…俺、越せないかも知れない…冬」

「なんて事いうの！そんなこと言わないで…前に先生が『よくなつた』って褒めてたじゃない、ね？だから」

「そう、だな…けど、自分でも分かるんだよ。そんな気が、してならない」

「そんなことない！あたしの気を分けるから、悲しいこと言わないで…」

雪乃は、きつく裕一を抱き締めた。

「温かい…」

「お願いよ、裕一さん」

（あなたの為なら、あたしは…どうなったっていい。生きて！お願いよ）

そっと、瞼を閉じる裕一。

雪乃の体が、ほのかに輝いて、光の粉を散らす。

光の粉が裕一を包むと、青白かった裕一の顔色が、あっという間に戻り始めていた。

「ありがとな、雪乃…お前と話したら、なんか元気出た」

「よかったあ、今日はそろそろ行くね。看護婦さんに見つかったら、

怒られちゃう。また来るから、おやすみ」

「おやすみ、気をつけて帰れよ？」

頷いて手を振ると、雪乃はドアを閉めた。

「うつ……」

雪乃は、口を押さえて咳き込んだ。

彼女の顔色は、夜目にも青白かった。

力を与える負担は大きく、雪乃自身を、深く蝕み始めていた。しかし、まったくいやな気持ちではない。

口を押さえた手には、べつとりと鮮血がこびりついていた。うつすらと微笑むと、雪乃は、深闇に消えていった。

それから何日も、幾月日も、雪乃は病院へ通った。

「どう？ 具合は……」

雪乃が病室に顔を出すと、裕一は売店の袋をあさっていた。

「ああ雪乃、最近調子よくてなあ、長く歩けるようになったんだ。ん、お前……少し痩せたか？」

「そんなことないわ、よかったわね。その調子よ」

一瞬、雪乃は動じそうになったが、慌てて平常を保つ。

「そうかなあ？」

「気のせいよ。今日はちょっと、様子見に來ただけなんだ……だからもう、行くね？」

「あ、ああ」

らしくない雪乃の様子に、裕一は少し、首を傾げた。

体調でも、悪いんだろうか？

そんなことを考えながら。

そうしているうちに、ついに見かねた皎が、雪乃を咎めた。

「雪乃、もう……裕一の所に行くな！」

「ダメよ、あたしが傍にいなきゃ……あの人はダメなの」

壁により掛かり、立っているのもやつとの状態で、それでも尚、雪乃は会いに行こうとする。

「雪乃っ！お前、こんなに痩せちまってんだぞ！？分からないのかっ」

「行か…なきや」

「雪乃！？」

ぐらりと揺らいだ雪乃を、皎は慌てて抱きとめた。

「もう、行かなきゃ…あの人、きつと待ってる」

「行くな！なんで、なんでアイツなんだっ、アイツじゃなきやダメなんだ！」

ふらつく足で、行こうとする雪乃の腕を、皎は無理やり掴む。

「皎…」

「俺だっつて、お前が好きなんだよ！…だから、雪乃、今日はもう行くな。休んだ方がいい」

「う、ん…」

痛み（後書き）

どうも、維月です。
ちょっと切ない話をお送りしております。
よろしければ、謁見の程を

悲しまないで（前書き）

裕一は、ある夜に突然見た夢の中で、雪乃の死を告げられる。急激に回復をしたのが、雪乃のお陰だったと、今やっと気づく裕一だった。

悲しまないで

ある日、急に裕一は夢を見た。

それが夢だと分かったのは、自分の姿が、病院の寝間着に、裸足だったからだ。

（ああ、これは夢なんだな）

「ここ、どこだ？」

足の裏に感じる、柔土の感触がいやにリアルで、裕一は周りを見まわす。

どうやら、森の中にいるようだ、そこかしこに蔦^{つた}が茂っていた。道を歩いていたら裕一は、大して遠くない場所に、光を見つけた。

裕一は、光を見るうちに、なぜか不思議な気持ちになるのを感じていた。

（なんだろう、温かくて、なんか…愛おしいような）

「雪乃？」

（あれ、どうして雪乃を思い出すんだろ？俺、あいつに会いたいのかなあ）

不思議な夢は、それから一月以上続き、ある日を境に、ぷつぷつと見なくなった。

「光が弱い、もしかして、遠ざかってるのか？おい、待って…待ってくれっ」

そこで、目が覚めた。

（なんて不吉な…それに、なんだ、この胸騒ぎは）

裕一は、強く、強く布団を握りしめた。

そう言えば雪乃、あれから一度も来なかった。

なにか、あつたんだろうか？

「こりゃ驚いた…奇跡だよ！」

再度裕一を診た医者は、驚きの声を上げた。

「え！？まさか…嘘ですよ、そんな」

「もう、すっかり完治していますよ、データにも、ほら。退院も無理じゃありません」

「は、はあ…どうも」

目の前に広げられた、自分のデータ。

血液がん数値も、全てが正常値。

そんな。

そんなはずはない…。

肺ガン、それも末期のものだったのに…。

不思議なことに、死病だったはずの裕一は、すっかり完治していたのだった。

退院を済ませた日の夜、裕一は再びあの夢を見た。

うす暗い森の中を、裕一は一人で歩いていた。

しかも、パジャマのままで。

「ああ、この夢か…ずいぶん久し振りだな。なんだ、奥の方が、やけに明るいぞ？」

裕一は、明るいへ、明るい方へと進んでいった。

進んで行くに連れて、なにかが、もの凄い勢いで向かってきて、ぴたりと裕一の目の前で止まった。

【お前、裕一だな？】

向かってきた何かは、白い、大きな狐だった。

「なっ、キツ…ネ？が喋ってる、夢なんだろう？これ」

【さあな、ついてこい。こっちだ】

スタスタと、足早に歩いていくキツネに戸惑いながら、裕一は後をついていった。

大きなキツネに導かれていくと、林の奥がほんのりと明るく、よく見ると、たくさんの人たちが集まっていた。

「どうしたんだ？何が始まるんだよ」

きよるきよると、回りを見回す裕一。

集まった人々は、沈んだ表情で、一点を見つめている。

【見る】

皎が、そつと裕一の背中を押した。

人々の中心には、ひとときを輝く、白狐が横たわっていた。

「雪乃！どうしたんだっ、病気なのか！？」

【雪乃は、死んだよ…】

いつの間にか、人の姿になっていた皎が、横たわる雪乃の傍に突っ伏したまま、沈んだ声で裕一に言った。

「妖怪だろ！？雪乃が死ぬはずないっ、夢なんだろう？これ、なあっ」

裕一は、へたへたと座り込む。

【俺たちだつて死ぬ…ただ、他より寿命が長いだけのことだ】

「どうして…」

【雪乃は…あいつは、お前に命を与え尽くしたんだっ！助かる見込みのなかった、お前を助けるためにっ】

茫然と呟いた裕一に、我慢できなくなった皎は、つい怒鳴り散らしてしまった。

裕一は、その時、全てを悟った。

雪乃に逢うたび、元気になる気がしていたのは、雪乃自身が、自らの命を削って与えていたから。

雪乃が最後に見舞いに現れた日、彼女は様子を見に來ただけだと言っていたなかったか。

全部、お前が持っていてくれたんだな？

【あいつ、言ってたよ…悲しむなっ】

「そう、だったのか？ごめん、ごめんな…。俺、何も知らなくて、全部…お前のお陰なのに」

わつと、泣き崩れた裕一は、まだ温かい雪乃の頬を、そつと撫でた。
「十夜だ…月が十二巡ったら、また会える…。その時まで、道は塞ぐよ」

咬は、静かに雪乃を抱きあげると、スツと深闇に溶けていった。

「また会えるって、ま、待ってくれ、おいっ、おーい！」

濃い霧に視界が遮られたように、急激に目の前が曇り、ついに、なにも見えなくなった。

裕一は、枕元でけたましく鳴った目覚まし時計に、はち切れんばかりに目を開いた。

そこは、いつも見慣れた自分の部屋。

部屋の中は、分厚いカーテンのせいで薄暗い。

「夢…十夜、か」

裕一は、雪乃の家の前まで、散歩がてらに歩いてみることにした。除雪されていない道路は歩きづらく、何度か躓きそうになる。

「あゝ…だいぶん鈍^{なま}ってるなあ」

踏みつける足元が、しみた水気に、つんと痛かった。

「な、なんだこれ!？」

雪乃の家の前に足を踏み入れた裕一は、目を見張らずにはいられなかった。

本当なら、雪が積もっているはずなのに…。

彼女の家には、少しもその様子がない。

止まってしまったんだ、ここの時間は。

主を亡くした、この場所は…。

「ごめんな、雪乃」

転生…そして（前書き）

雪乃の転生が決まった晩、裕一は咬に連れられて、『転生の祭り』を見ていた。

転生…そして

それから、季節は味気なく過ぎていき。

再び冬が訪れて、小雪をちらつかせるようになった。

「あら裕一、もう部屋行くの？」

階段を昇りかけたとき、ひょっこりと、顔を覗かせた母親に呼び止められる。

「まあ、な…おやすみ」

裕一は、森の中を歩いていた。

今日は、やけに騒がしいような気がする。

【裕一、来ていたか…今迎えに行こうとしたところだ】

尻尾に灯をともし、白狐の咬が、ぴょんと跳びはねた。

咬に、連れられて歩いていくうちに、次第に人の数が増えていくのが分かる。

まるで、祭りみたいだ。

「なんだ、ずいぶん人が多いな」

【今宵、やつと時が巡った…祭りがある、だから人も皆も集まろうさ】

「祭り？なんだ、きいてないぞ？」

【転生が決まった、その祝いだ】

「え？」

【古い器を改め、新たな器へ移るのさ…そら、始まった】

しゃりんと、軽やかな鈴の音が薄闇に響き、それに続いて齒切れのよい鼓の音。

雅楽の調べに乗って、狐たちに担がれたお輿が進んでくる。

なんと言えればいいんだろう、この光景はきれいだ。

いや、キレイなんて言っちゃえば一言だ、これは…。

『狐の嫁入り』は、きつとこんなものなんだろうな。

幻想的、という言葉が、よくそれに当てはまった。

「…きれいな夢だな」

夢、と言った瞬間、音が消え、景色が急激に色を失う。

「え？」

【坊よ…よくお聞き。これはな、多くの祈りで成り立つもの、その祈りが少しでも減ると、成り立たぬ。おぬしは、これが夢だと思いたいのか？】

どこからともなく響いた声に、裕一の胸は、ひとしきりの痛みを覚えた。

こんな幻想的な風景、もう一生見られないかも知れない。今だけでも、せめて見ていたい。

「夢じゃない、これは、夢じゃない」

【そうじゃ、そのいきじゃ】

ふわっと、体を縛っていた気配が消え、裕一は深く溜息をつく。それと同時に、再び音と景色が戻った。

「今の声、お前だったのか？」

裕一は、きょとんと咬を振り返る。

【裕一、そろそろ夜が明ける。2日後の朝に…】

それに照れたように、咬は、ぷいと背中を向けて言った。

「なんだって？よく聞こえないぞ…おーい、おーい！」

裕一は、急に飛び込んできた光のまぶしさに、腕で目を庇う。どうやら、昨夜カーテンを閉め忘れたようだ。

「…2日後？今日入れてか？」

「あら、おはよう。ゴハンは？」

玄関で靴を履いていると、またも母親に見つかってしまった。見つかったからどう、というわけではないのだけれど。

「いない、ちょっと出てくるよ」

「ふうん、いつてらっしゃい」

今日はなぜか、すんなりと通してくれたのを不思議に思いつつも、そつとドアを閉めた。

「毎日、どこ行くんだかねえ？」

「は…相変わらずかあ、雪も積もってないよ」

裕一は、雪乃の家を見あげて、ため息ながらに呟いた。
階段に腰掛け、ゆっくりと伸びをする。

「ん、冷て…」

ふわりと、綿雪が手の甲におりて、溶けた。

「あれ、雪？」

時が、動き始めた。

まるで、春が来て、氷が溶けて行くみたいに。

冬の朝、裕一は、雪乃の家の前に立ち竦すくんでいた。

「2日経った、雪乃、本当に」

景色は、少し積もった雪の他には、何も変わってはいない。

「はい、呼んだかしら？」

背後には、聞き慣れた声。

裕一は、勢いよく振りむいた。

「裕一さん、ただいま」

「雪、乃？ホントに雪乃か！？」

「ええ、帰ってきたわ？あなたに逢いに」

につこりと笑う雪乃に、裕一は胸が痛む思いをした。

「すまなかった…俺のせいで、お前を」

「そんな顔しないで、ね？裕一さん。謝るくらいなら、笑って？」

瞬間、裕一は力一杯、雪乃を抱き締めていた。

「っ苦し」

「あ、ああごめん…あのな、雪乃」

「言わなくても、分かってるわ？もう、どこにも行かないから…もう一度、その、妖怪のあたしと生きてくれますか？」

はにかみながら言った雪乃を、裕一は柔らかな眼差しで見つめた。

「妖怪でも、ちつともかまやしない！俺からも頼む。雪乃、本当にありがとうっ」

「…はい」

ありがとな　　。

悲しまないでって、言ったでしょう？

あたしが、傍にいるからね？

涙は、幸せな数だけ　流れるものなのよ。

だから、悲しまないで…。

転生…そして（後書き）

どうも、維月です。
読者さま方、ここまでご苦労さまでした。
これからも、どうぞよろしくお願い致します。
>それでは、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1500a/>

悲しまないで

2010年10月8日15時13分発行